

景行天皇皇后播磨稲日大郎姫命 日岡陵の墳丘外形調査

清喜裕二 横田真吾

はじめに

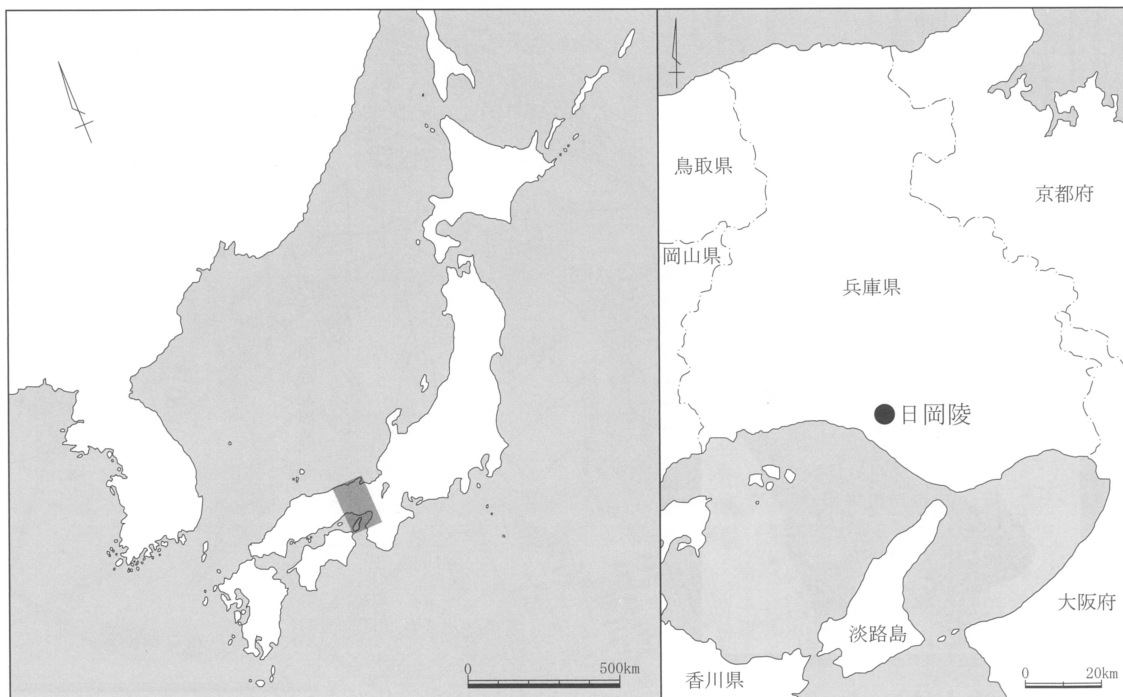
本陵は、兵庫県加古川市加古川町大野に所在する、現状で全長約82 mを測る前方後円墳である。加古川の東岸で、現在の加古川町域北端部付近にあたる日岡丘陵の最高所にあたる日岡山頂（後円部頂の標高約58 m）に位置している（第1・2図）。

周辺の地質・地理 加古川市とその周辺は、地質的には西南日本内帯のうち丹波帯を基盤にしていると考えられている。そして、加古川流域には広く沖積層が堆積しており、平野部を形成している。また、平野部との境付近には段丘も形成されている。本陵の所在地はこの平野部の北端付近にあたり、近隣に日岡山より高い地形が認められないため、現在は樹林により視界を遮られているが、本来は周辺の眺望がすこぶる良好と考えられる。

周辺の遺跡 本陵周辺には各時代の遺跡が点在している。ごく近隣では、同じ日岡山の南斜面に旧石器時代の日岡山遺跡が知られており、ナイフ形石器や細石刃石核などが採集されている。縄文時代の遺跡はやや少なく、弥生時代の遺跡としては、同じ加古川町内に溝之口遺跡、美乃利遺跡や北在家遺跡などが知られる。これらは、弥生時代の住居跡や水田などの各種遺構が認められるほか、他の時代の遺構・遺物も確認されている複合遺跡である。

古墳時代については、古墳の調査例が多く知られている。加古川流域は、本陵の東方にある西条古墳群中の行者塚古墳、加古川を挟んで北西にある平荘湖古墳群中のカンス塚古墳や池尻2号墳など渡来系遺物が比較的顕著な地域といえる。

本陵は前方後円墳を中心とした日岡山古墳群の一角を占めている。南大塚・東車塚の各古墳からは三角縁神獣鏡や腕輪形石製品が出土しており、詳細の不明な古墳もあるが、おおむね前期を中心とした古墳群と考えられている。そのほか、後期の群集墳も20基程度築かれていた。また、北東約2 kmに西条古墳群が分布



第1図 日岡陵 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)

する。内行花文鏡等を出土した弥生時代終末期の墳丘墓である西条52号墓のほか、渡来系の遺物を多数出土した行者塚古墳をはじめとして、日岡山古墳群に後続する中期の古墳群が形成されている点が注目される。そして、日岡山古墳群と同様に後期の群集墳も近隣に形成されている。人塚古墳には、隣接して西条廃寺が造営されており、この地域が古代に至るまで中心的地域であったことが知られる⁽¹⁾。

古代には先述の西条廃寺をはじめ、古代寺院が点在しており、その後日岡山麓には日岡神社や常楽寺が造営される。

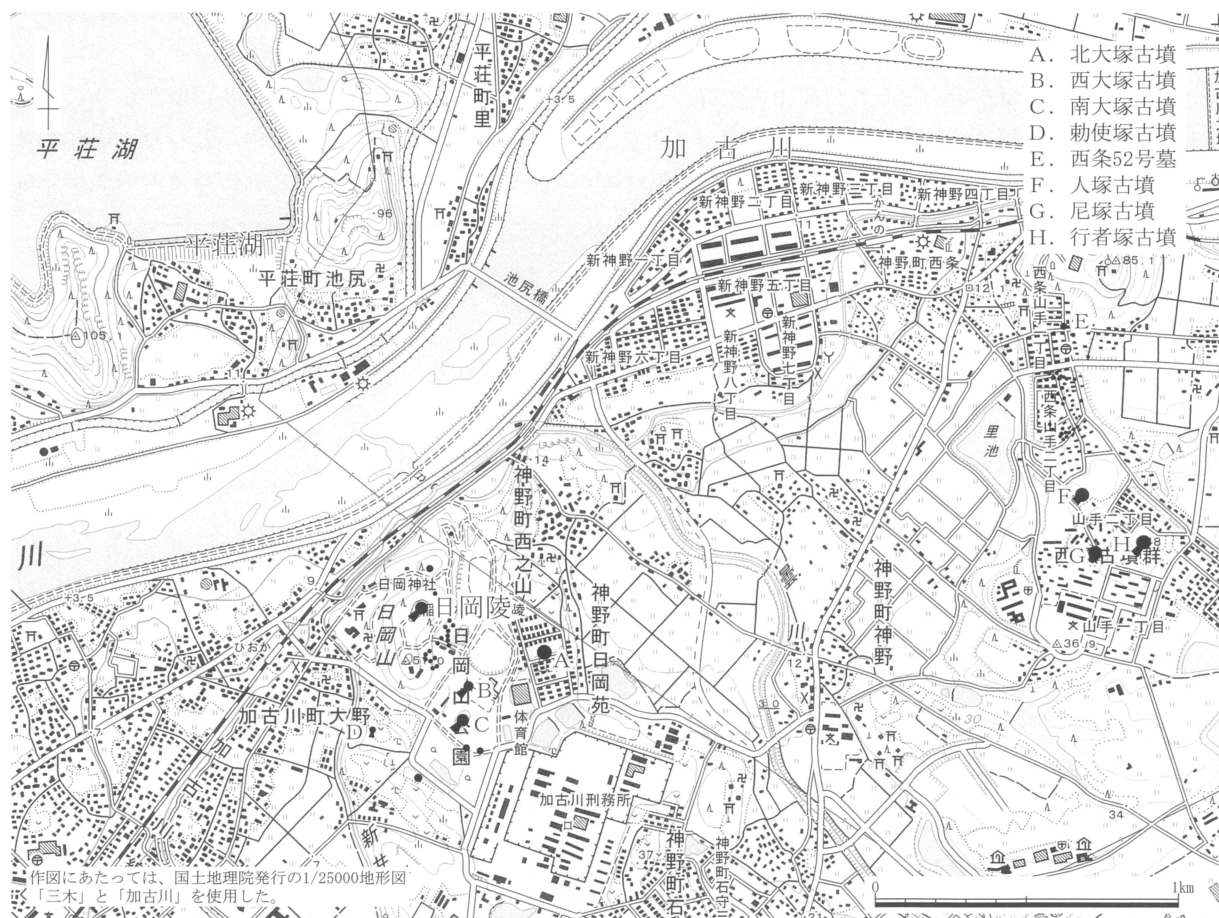
来歴と調査の経緯 本陵の治定は明治16年(1883)である。『播磨国風土記』賀古郡の条によると、同陵は日岡の地に築かれたとされる。また、「褶墓」と称されるに至った一連の伝承についても記述されている。本陵は、墳丘のみならず周辺地を広く取り込んでおり、陵墓地全体の面積は約37,900㎡である。

墳丘外形調査は近年継続して実施しているが、平成20年度からは遠隔地に所在する古代高塚式陵墓について計画的に行っている。本誌61・62号に掲載した大吉備津彦命墓(平成20年度実施、岡山県岡山市)、本誌本号に掲載している五十狭城入彦皇子墓(平成21年度実施、愛知県岡崎市)に続き3年目の調査にあたる。本調査は、平成23年3月9日～18日の期間で、陵墓調査室の担当者を中心に、桃山陵墓監区事務所職員等の協力を得て実施した。特に、本陵の管理をお願いしている非常勤職員の松尾康正氏には、多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。(清喜裕二)

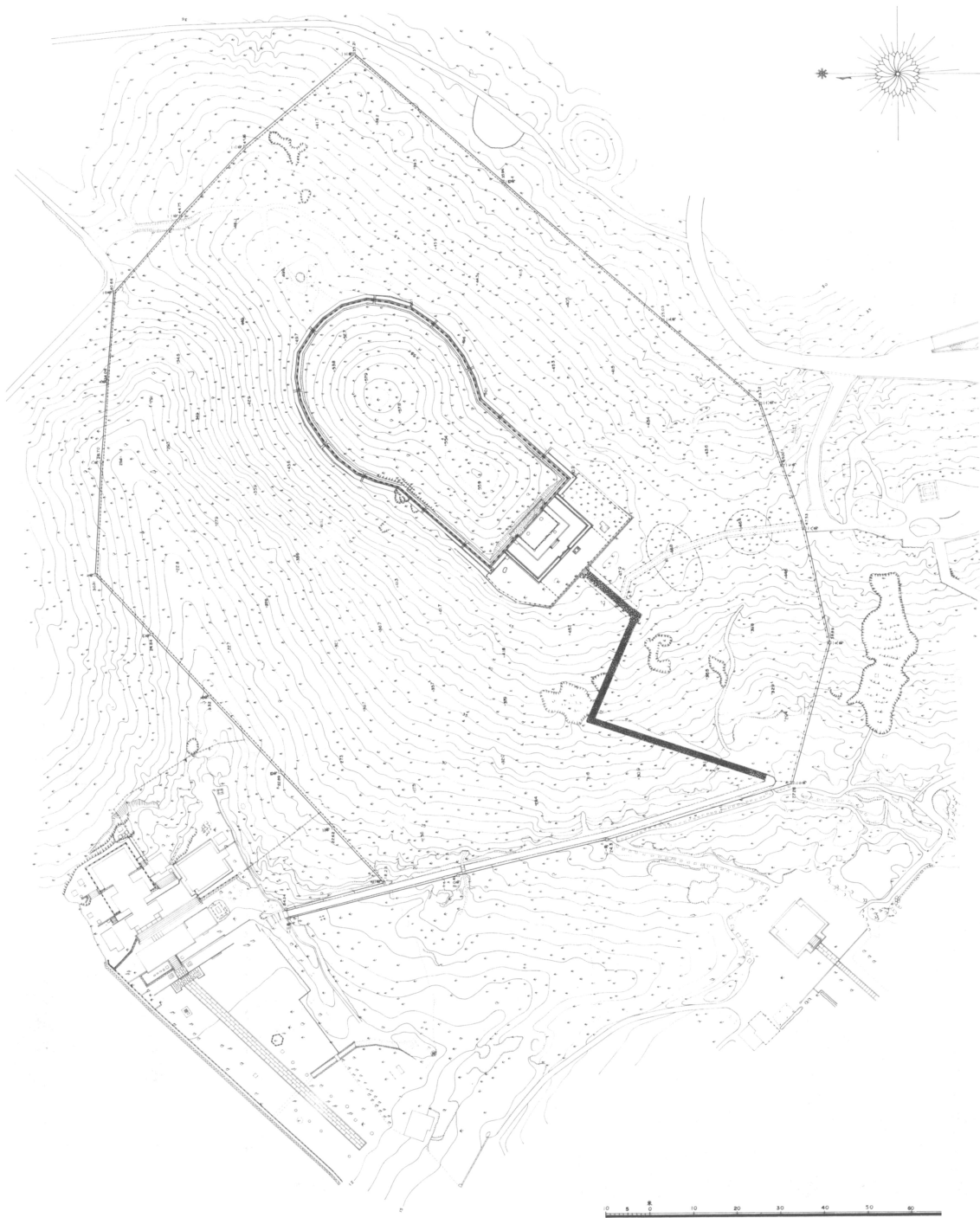
1 墳丘の調査

(1) 測量図の作成

これまでに作成されている本陵の測量図として陵墓地形図がある(第3図)。昭和3年に測量(昭和4年製図)されたものである。等高線間隔は1mであった。よって、墳丘形態や規模・構造の詳細な検討を行



第2図 日岡陵 詳細位置図 (1/25,000)



第3図 日岡陵 陵基地形図 (1/2,000)

うには情報量が不足していた。そこで、今回の調査にあたっては、陵墓管理上も学術上も有用となるような精細な測量図の作成を主要な調査目的とした。

陵墓地形図作成にあたっての座標軸は、縦横距原点として当時の陸地測量部二等三角点一色が使用されている。本調査による新規の測量図作成に先立っては、まず専門業者に委託して基準点測量と水準測量を新たに実施した。準拠する測地系は世界測地系で、水平位置の座標系は平面直角座標第Ⅵ系に基づいている。その基準点と水準点をもとにして、現地で随時必要な測点を設置しつつ作業を進めた。測量方法はトータルステーションを用いた平板測量である。上記の基準点測量から得られた座標軸を設定したうえで、スケール1/100、等高線間隔25cmの原図を作成した(第4図)。

新たに測量したのは、墳丘を廻る石列から内側の範囲で、その面積は約3,810㎡である。

なお、第4図は新たな測量図と陵墓地形図に示された周辺地形の一部とを合成したものであるため、石積みより外側は陵墓地形図の等高線である。両者は高さの基準が異なっているため、等高線の近接する場所では齟齬が認められる。読図にあたっては注意されたい。(清喜)

(2) 周辺地形と墳丘の所見

周辺地形 日岡陵は、日岡丘陵の南西にのびる支尾根上に位置する。そこは尾根のほぼ最高所であり、一見して、地形に沿うよう北東・南西主軸で墳丘が築かれていることが分かる。墳丘の主軸は、座標北より約41度東に傾いている。墳丘は、近代に整備された石柵により囲まれている。石柵の南・北側は、尾根のつながりによって、傾斜は緩やかであるが、石柵の東・西側は、急な斜面地となっている。特に西側は、日岡陵の尾根とその西側にあるもう一つの尾根によって挟まれた谷地形である。墳丘のくびれ部西側では、岩盤が一部露出している。岩盤は、石柵外側の石列にもかかり、この部分は石列が途切れている。

以下では、墳丘の現状とそこから推測される状況を述べる。

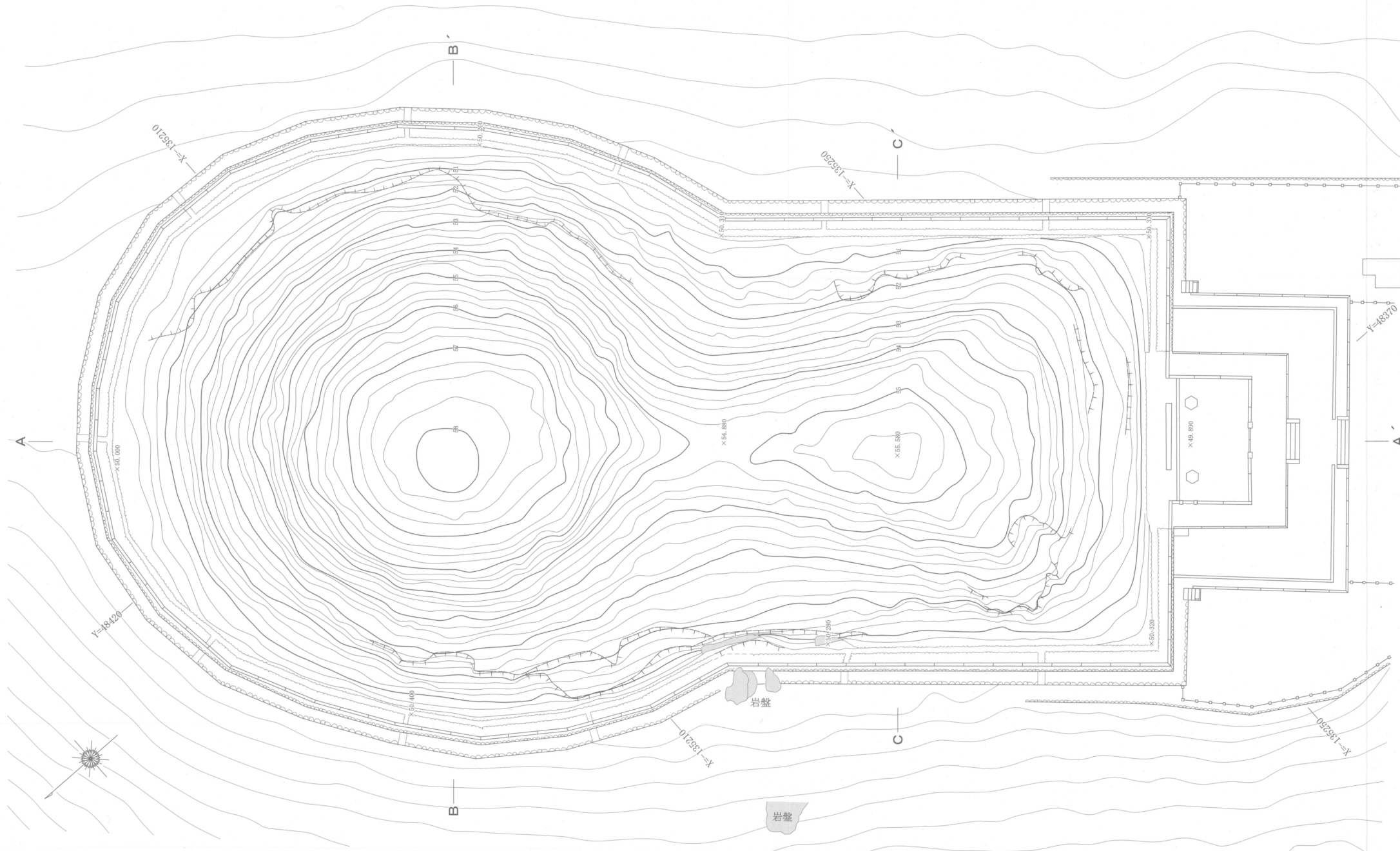
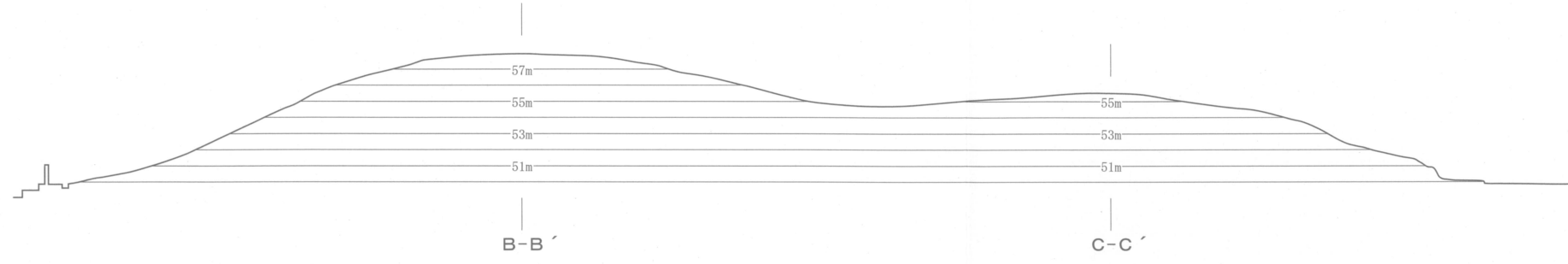
墳形 前方後円形の墳丘である。墳丘は、後円部・前方部・くびれ部ともに明瞭であり、若干崖状に崩れている箇所や狐の巣穴等はあるものの、比較的良好な残存状況である。前方部と比べ、後円部は規模が大きく、墳頂も高くなっている。前方部の裾は、石柵内の排水溝まで続いており、本来の裾は柵外までのびる可能性がある。墳丘の主軸を立面的に見てみると、後円部墳頂よりくびれ部にかけて低くなり、くびれ部より前方部墳頂にかけて今度は少し高くなっていることが分かる。

規模 墳丘の主軸長は、後円部北裾の平坦面と前方部南裾の急激に落ちる傾斜変換点より、約80mである。後円部の東西最大幅は、石柵内の排水溝付近で約45m、前方部の東西最大幅は、石柵内の排水溝付近で約33mとなっている。後円部の高さは、墳頂で標高58.25m、後円部裾からの高さは約7.5mを測る。前方部の高さは、墳頂で標高55.58m、前方部裾からの高さは約5mを測る。くびれ部の高さは、頂部で標高54.88m、くびれ部裾からの高さは約4mを測る。

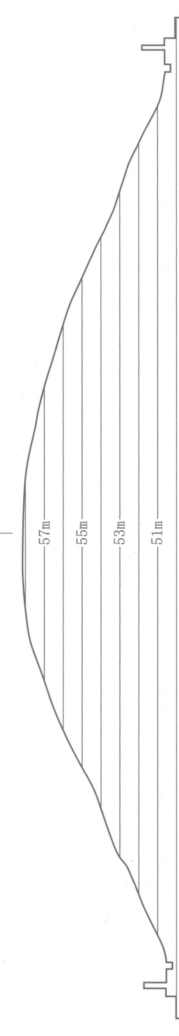
段築 段築は、等高線の粗密や現地での目視では確認できなかった。後円部については、東側と比べて西側の等高線が若干密である以外、傾斜は途中で大きく変わらず、斜面途中にはテラスの可能性を持つ有意な平坦面も認められない。前方部については、東・西側の等高線は密であるが、南側は間隔が広がっており、傾斜は緩やかである。特に南東隅については、標高52mから53mにかけて緩傾斜で、若干平坦面状になっている。しかし、南西隅では同様の状況は見られないため、ここがテラスの可能性を持つ平坦面なのか否かは不明である。くびれ部については、西側と比べて東側の等高線が密である以外、傾斜は途中で大きく変わらず、後円部・前方部と同様、斜面途中にはテラスの可能性を持つ有意な平坦面も認められない。

葺石 墳丘では、葺石に関わると考えられる礫が前方部・後円部双方の斜面で一部露出している。しかし、それらが当初の位置を保ったものか否かは不明である。露出している礫の大きさは、ほぼ拳大であり、角礫ではなく比較的丸みを帯びた円礫である。なお、前方部南裾中央付近は、幅約13m、高さ約0.7mにわたって拳大の円礫が、約70度の急傾斜で積み上げられている。この礫群は、傾斜が極めて急であること、拝所前面の石列幅と同じであることなどから、墳丘築造当初からのものではなく、拝所築造時など近代に整備されたものと考えられる。

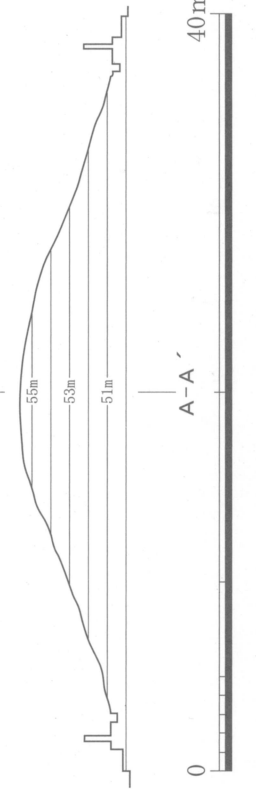
墳丘主軸 (A-A') 断面図



後円部 (B-B') 断面図



前方部 (C-C') 断面図

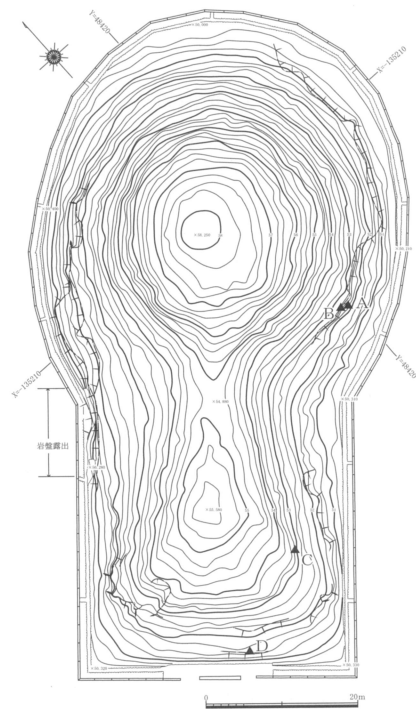


第4図 日岡陵 墳丘平面図・断面図 (1/400)

石列・石柵・排水溝 墳丘を取り囲むように内外2列の石列、石柵、排水溝が設けられている。いずれも近代に整備されたものである。外側石列は、人頭大の礫を外側に平坦面が揃うよう並べられている。石の高さ分、外側石列の内側は高くなっている。内側石列は、外側石列の礫よりやや小ぶりの礫を数段積んで石垣状にしてある。外側石列と同様、石の高さ分、内側は1段高くなっている。石柵は、内側石列のやや内側に設けられた高さ約1.3mの石柵である。石製の角柱を組み合わせて作られている。排水溝は、石柵の内側、現状の墳丘裾に設けられている。内側石列とほぼ同じか、やや小さめの礫を平坦面が内側に揃うよう並べ固めている。排水溝の深さは約0.3m、幅は約0.3～0.4mである。排水溝の吐水口は、後円部外側石列に7箇所、前方部外側石列に4箇所存在する。吐水口への溝は、石柵と内側石列の下を抜けており、外側石列の吐水口上に溝の蓋石が見られる。(横田真吾)

2 採集遺物について

墳丘の現況観察および測量作業中に、遺物を4片採集した。1は、後円部の南東側斜面、A地点で採集した土師器片である。その薄さから、ここでは土師器片として記述するが、その胎土や色調から見た場合、埴輪の可能性も捨てきれない。辺および外側表面が残らない小片で、部位は不明である。内面には、ナデを施したような跡が見えるが、極めて不明瞭である。色調は灰黄褐色で、胎土に径1から2mm程の礫を約1%含む。2は、後円部の南東側斜面、B地点で採集した円筒埴輪片である。辺が残らない小片で、何段目の部位かは不明である。内外ともに表面は、突帯以外摩滅のためにほとんど残っていない。内側表面には、僅かにナデの跡が筋状に残る。突帯形状は台形で、突帯が剥がれた部分にはタテハケの跡が残る。色調は灰黄褐色で、胎土に径1から2mm程の礫を約1%含む。3は、前方部の南東側斜面、C地点で採集した埴輪片である。辺が残らない小片で、埴輪の種類および部位は不明である。内外ともに表面にハケメが残る。調整について、内側表面のハケメはナデにより半分ほど消されている。色調は灰黄褐色で、胎土に径1から2mm程の礫を約1%含む。4は、前方部の南側斜面、D地点で採集した埴輪片である。辺が残らない小片で、埴輪の種類および部位は不明である。内外ともに表面は、摩滅のためにほとんど残っておらず、調整は不明である。色調は灰黄褐色で、胎土に径1から2mm程の礫を約1%含む。それぞれの焼成について、1から4までいずれも黒斑は見られなかった。(横田)



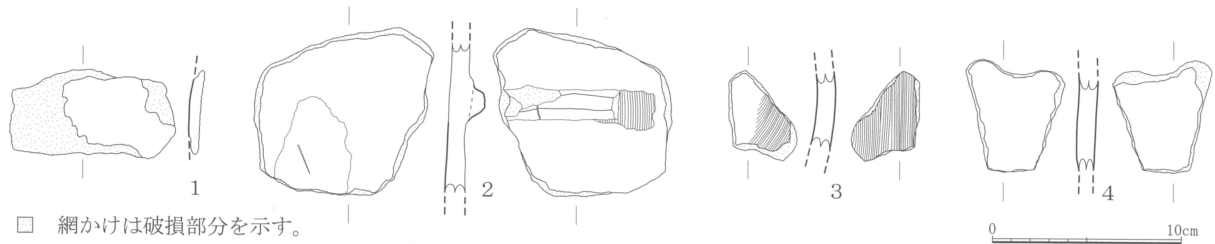
第5図 日岡陵 遺物採集位置図 (1/1000)

3 本陵に関連する記録等について

本陵については、墳形に関して幾つかの指摘や研究がある。春成秀爾氏は、地元住民の話が伝わることから、本陵の前方部が治定以後に新たに付されたものである可能性に言及している⁽²⁾。一方、櫃本誠一氏は、『明治天皇紀』など各種文献を参考にしつつ、後世、特に明治期に墳形の変更が行われたことはなく、本来前方後円墳として築造されたものと結論づけた⁽³⁾。

先述のとおり、墳丘の詳細な測量図を作成して、現地の踏査も行った結果、新たに前方部が付加されたような状況は認められず、当初から前方後円墳として築造されたものと考えられるが、別の視点からも検討しておく必要がある。以下に、当庁で保管している本陵に関する記録を確認しつつ、本陵の整備の過程を概観しておきたい。

本陵に関係する「特定歴史的公文書等」(以下、「公文書」)は、戦前のものとしては、治定された明治



第6図 日岡陵 採集遺物実測図 (1/4)

16年から昭和12年まで確認できる。公文書の残っていない年があり、また関東大震災で焼失した記録もある。治定に関わる明治16年の公文書は、大正12年の関東大震災で焼失している。それらも含めて件名を確認すると、関連するものとして80件を挙げることができる。そのうち、大半にあたる60件は工事に関わるものである。こまめに予算をかけて管理を行っていたことがわかる。

工事の内容は生垣の手入れなどが基本であり、生垣あるいはそれに関すると考えられる件名は33件に及ぶ。殊に明治期については顕著である。基本的に、生垣の手入れを継続的に行う一方で、並行して付属物等の新設・修繕が行われていた。新設・修繕に関する件名は27件であり、この2者で公文書として残る記録の4分の3を占めることになる。

「置土」に限定せず、少し具体的に本陵整備の経過をみると、明治18年に「兆域へ官有地編入ノ件」とある。この時に、農商務省の官有地を引き継ぐ形で、周辺地が大きく取り込まれて「境界杭建設ノ件」と併せて、その時点での境界線が確定されたと考えられる。その後、明治40年に「兆域へ官有地編入ノ件」「兆域へ国有林編入ノ件」、大正元年には「兆域に接続する国有林地を同御陵兆域へ編入方本寮へ上申ノ件」とあり、現在の陵墓地が確定されたと考えられる。

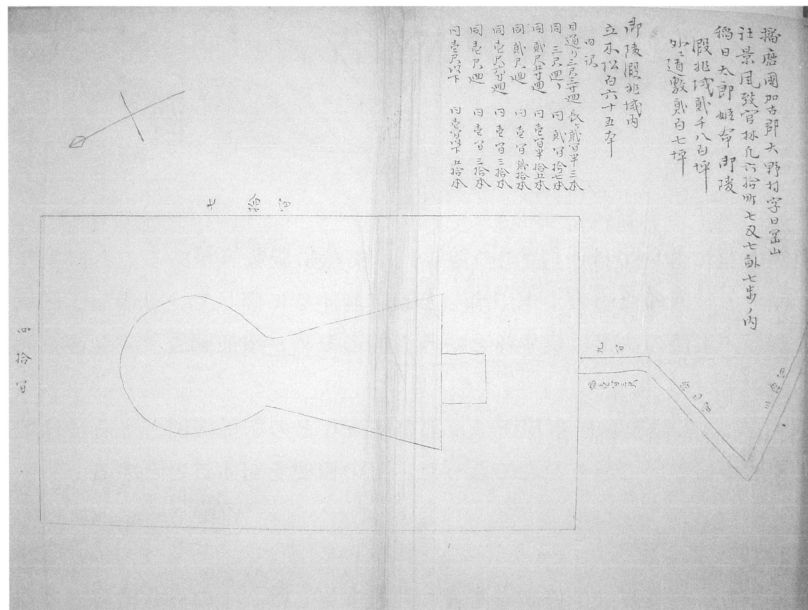
昭和3年には「測量完成報告ノ件」という記録があるが、この昭和3年の測量は、先述した陵墓地形図の作成を指す。

ところで、工事関係の公文書のうち、「置土」に関わる件名は5件であるが、その他の件名の中でも項目として置土を含んでいる場合がある。その中で確実に墳丘に対して行われたと考えられるものは2件であり、多くは本陵に至る道や外構囲障の外側へのものであって、規模が小さいだけでなく、墳丘に対して直接的に盛土を行うようなものはごくわずかであったことがわかる。また、「置土」の記録は明治21年を初出とするが、その後しばらくは認められず、再び明治36年に認められ、大正元年までの比較的短い期間に集中しているようである。この明治21年の工事で、墳丘周囲を廻る石柵、石垣や石組溝などが造られているが、この時に前方部南側面が削られて、その部分に石積みが設けられている。

明治36年は、樞本氏も述べるように、加古川には陸軍の播磨大演習に伴い明治天皇の行幸があり、本陵には侍従による御代拝が行われたほか、明治天皇による陵前を含む日岡山頂での天覧が行われている。墳丘にそれなりの修繕を加えたとすれば、十分なきっかけといえよう。そして、この年の件名は6件であり、1年で挙がる件名としてはもっとも多い。特に、大演習前の10月に行われた修繕項目は多岐にわたり、内容からもこれが御代拝や行幸を控えてのものであったことは明らかである。しかし、修繕項目のひとつであった「置土」については、拝所窪地を埋めたり、現地は岩盤が露出しているため、その地形を均すためのものである(図版11-5)。さらに、生垣の手入れなどは継続的・経常的なものであり、修繕についても項目は少ないものの、明治36年に限ったことではない。必要に応じて他の年にも行われていることから、項目は多岐に渡り、工事内容に多少のてこ入れがあったとしても、基本的には経常的な管理の延長線上に位置づけられるといえよう。明治36年のみ、殊更に大規模な工事が実施されたとはいえないであろう。

また、明治42年には皇太子が本陵を参拝されているが、若干の修繕がなされたものの、特別なことが行われたような記録はみられない。

このように、まとまった整備の契機となり得る行幸の行われた明治36年も含めて、治定後の墳丘に大きく手を入れたような工事の記録は見あたらず、全体の流れとしては、むしろ経常的な管理の記録としてとら



第7図 明治18年兵庫県作成引継取調書付図

えることができるのである。

少なくとも公文書から窺う限り、本陵で前方部を付加するような大規模な「置土」(盛土)が行われたと考えることは難しく、それは現地での所見とも一致すると理解している。

なお、先に挙げた明治18年の「兆域二官有地編入ノ件」では、農商務省から宮内省への引き継ぎにあたり、兵庫県が引継取調書を作成しているが、その添付図面には本陵の墳形は前方後円形で描かれている(第7図)。治定に伴う公文書が失われているため、治定時点での墳形を確認することはできないが、上記資料は、治定後もっとも古い記録として位置づけることができよう。(清喜)

まとめ

今回の調査により、墳丘の詳細が明らかとなった。現存する数値で、全長約80mを測る前方後円墳である。くびれ部付近に露岩がみられるため、墳丘のある程度までは地山を基盤にしていると考えられる。現状で段築は認められないため、無段であったか、テラス面があったとしても狭いものであった可能性が高いと考えられる。墳丘斜面上に石材が認められることから、葺石は存在すると考えられる。また、埴輪片が採集されているので、埴輪列が存在していると考えられるが、地表面では確認できない。

墳丘周囲には石柵が廻っているが、本来の墳丘形態に沿ったものではないため、一部石柵により墳丘裾を削られている箇所がある。特に、前方部前面と側面で顕著である。

遺物については、埴輪片3点・土器片1点を採集した。いずれも小さな破片であり、摩滅も認められるため細かい情報の抽出は難しい。

また、墳形に関しては、これまで改変の可能性を指摘されたこともあったが、今回の測量成果と公文書等の検討の結果、築造当初から前方後円墳であったと考えることに問題は認められないと考える。

本報告が、研究上資するところがあれば、幸いである。

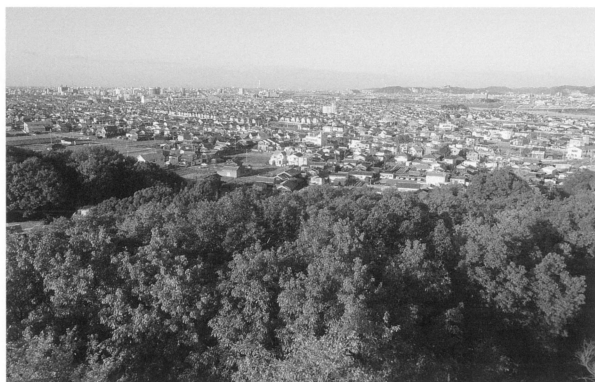
(清喜・横田)

註

- (1) 西谷眞治ほか『加古川市史』第4巻 史料編I、兵庫県加古川市、1996年。
- (2) 春成秀爾「捏造された前方後円墳」『考古学研究』第17巻第2号(通巻66)、考古学研究会、1970年。
- (3) 櫃本誠一「播磨国風土記にみえる「褶墓」の墳形—一陵墓研究の一事例として—」『前方後円墳・墳丘構造の研究』、学生社、2001年。



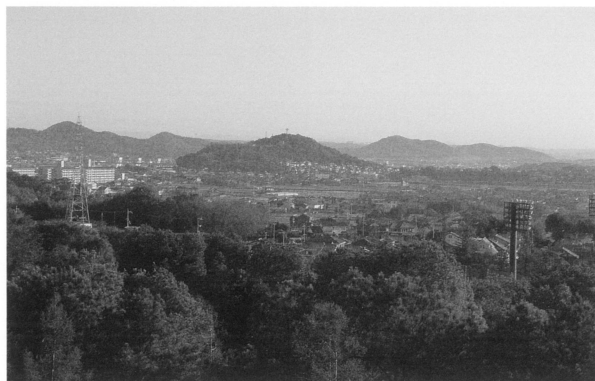
1 加古川から臨む日岡山（西から）



2 日岡山頂〔展望台〕から臨む平野部（北東から）



3 日岡山頂から臨む日岡陵と平荘湖（南東から）



4 日岡山頂から臨む西条古墳群一帯（南から）



5 日岡陵参道岩盤露出状況（拝所南方）



1 後円部 北東側裾（西から）



2 前方部 北西側斜面（1）（後円部上から）



3 前方部 北西斜面（2）（前方部端から）



4 北西側くびれ部 岩盤露出状況（1）（北から）



5 北西側くびれ部 岩盤露出状況（2）（北から）



6 葎石露出状況



7 採集遺物